

建築学生ワークショップ 比叡山 2017 architectural workshop hieizan

参加学生募集!

Call for entry

5.31

応募締切



制作者
持井英敏 (京都工芸繊維大学大学院修士1年)
大石麻貴 (京都女子大学4年)
横松温大 (立命館大学15年)
近藤由紀 (富山大学2年)
織田美風 (福井女子大学10年)
近藤由紀 (富山大学2年)
織田美風 (福井女子大学10年)

Photo © Satoshi Shigeta

日本仏教の聖地 — 比叡山

比叡山について

その場所のもつ歴史や意味、地形や風の流れといった文脈を読むことを始点として建築はつくられていきます。ですから、建築にとって「場」を読み解くことは始まりであり、最も重要なことといえます。これを学ぶことは建築の道を歩み始めた学生にとって大切であり、実地でなければ学び得ないことだと考えています。

比叡山 1200 年の歴史の中で培われてきた人間のちから。その霊場のもつ自然のちから。これらを、その場に身を置き、天台宗の教えにふれながら読み解いていく。その過程で他校の生徒はもちろん、地域の方々や参拝の方々の様々な考えにふれながら読み解いていく。普段、学内の似通った価値観の中で学んでいる学生にとって、大変貴重な経験になります。

比叡山延暦寺は、世界の平和や平安を祈る寺院として、さらには学問と修行の道場として、日本仏教各宗各派の祖師高僧を輩出し、日本仏教の母山と仰がれています。

山内は「東塔 (とうとう)」「西塔 (さいとう)」「横川 (よかわ)」と呼ばれる 3 つの区域に分かれており、東塔は現在、西塔は過去、そして横川は未来空間を現し、そのご本尊をお参りすることで、根本に立ち返り、今生かされていることに感謝をする祈りの場所となっています。

日本仏教の中心である比叡山に、全国で建築を学ぶ大学生が集まり、過去 1200 年に渡って受け継がれてきた歴史を、現代の問題とともに未来へとつなげていくために、「今、この場所から」伝えていくべきことを、それぞれが真剣に考え、原寸大の空間として表現します。延暦寺発祥の地であり、本堂にあたる根本中堂を中心とする区域において、作品を展示することで、訪れた人が中に入り、心を落ち着かせ、祈りを捧げることができる、小さな建築空間を創出します。

将来を担う学生たちが今という時代に向き合い、この場所でできることに全力で取り組むことで、「今、この場所から」世界に向けたメッセージを発信していきます。学生たちはきっと、その若い感性によって新たな発見をし、未来を創造する提案をしてくれることでしょう。



根本中堂



阿弥陀堂



大講堂



釈迦堂



大黒堂



常行堂

Architectural Workshop Hieizan 2017

開催場所 **比叡山延暦寺（滋賀県大津市）**

平安時代初期の僧侶 最澄により開かれた日本天台宗の本山寺院。1994年にユネスコの世界文化遺産に、古都京都の文化財として登録されている。



現地滞在スケジュール

6月24日(土) 現地説明会・調査(日帰り)

7月22日(土) - 23日(日) 提案作品講評会(1泊2日)

8月22日(火) - 28日(月) 合宿にて原寸制作(6泊7日)

8月27日(日) 公開プレゼンテーション

開催期間 **2017年8月22日(火) - 8月28日(月)** 合宿にて原寸制作(6泊7日)

参加費用 **実費**(宿泊費、保険代、図録・資料費、一部食費等 約¥35,000 事前徴収制)

- ※ 現地までの交通費は各自別途負担となります。
- ※ このワークショップは、開催地の有志の方々のご協力と、学生の参加費により一部運営をしています。

参加申込 **ウェブサイトからお申込みください** <http://ws.aaf.ac>

- ※ 参加者募集期間 2017年2月1日(水) ~ 5月31日(水) 23:59 必着
- ※ 参加対象者 建築および都市、環境、デザイン、芸術など、これに類する分野を学ぶ学生および院生
- ※ 参加人数 定員60名程度(大学院生8名+参加部生42名+運営サポーター10名)8グループを予定。ただし、参加申し込み多数の場合は、主催者による選考をおこないます。予めご了承ください。(原則として、先着順の応募を優先しますのでお早めに応募ください)
- ※ 運営サポーター 開催期間中、合宿期間中の運営サポーターも募集いたします。(学部は問いません) 定員5~10名程度(参加・宿泊費無料 開催期間中) ※ 現地までの交通費は各自別途負担となります。

参加予定講師

建築・美術 両分野を代表する評論家をはじめ、第一線で活躍をされている建築家やアートディレクター、世界の建築構造研究を担い教鞭を執られているストラクチャー・エンジニアによる講評。また、近畿二府四県の大学で教鞭を執られ、日本を代表されるプロフェッサー・アーキテクトにご参加いただけます。

五十嵐 太郎(建築史家・建築評論家 東北大学 教授)	芦澤 竜一(建築家 滋賀県立大学 教授)
石川 亮(美術家 成安造形大学 研究員)	新井 清一(建築家 京都精華大学 教授)
西沢 大良(建築家 西沢大良建築設計事務所 主宰)	遠藤 秀平(建築家 神戸大学 教授)
南條 史生(美術評論家 森美術館 館長)	幸家 太郎(建築家 幸家太郎建築研究所 主宰)
竹原 義二(建築家 無有建築工房 主宰)	長田 直之(建築家 奈良女子大学 准教授)
	平田 晃久(建築家 京都大学 准教授)
江村 哲哉(構造家 アラップ構造エンジニア)	平沼 孝啓(建築家 平沼孝啓建築研究所 主宰)
腰原 幹雄(構造家 東京大学 教授)	藤木 庸介(建築家 滋賀県立大学 准教授)
櫻井 正幸(旭ビルウォール 代表取締役社長)	本多 友常(建築家 摂南大学 教授)
佐藤 淳(構造家 東京大学 准教授)	横山 俊祐(建築家 大阪市立大学 教授)
陶器 浩一(構造家 滋賀県立大学 教授)	吉村 靖孝(建築家 吉村靖孝建築設計事務所 主宰)

建築学生ワークショップとは

建築ワークショップは、建築や環境デザイン等の分野を専攻する大学生を対象にした、普通の大学生活では体験できないスクールで作品制作を行う地域滞在型のワークショップです。国内外にて活躍中の建築家を中心とした講師陣の指導のもと、開催地の歴史や地域環境を研究しながら、他大生との交流の中でその場所における社会的な実作品をつくりあげる経験を目的としています。

【スケジュール】

- 5月11日(木) 参加説明会開催(東京大学) 西沢大良
- 5月18日(木) 参加説明会開催(京都大学) 平田晃久
- 5月31日(水) 23:59 必着 参加者募集締切(参加者決定)
- 6月24日(土) 現地説明会・調査
- 7月22日(土) ~ 23日(日) 提案作品講評会と実施制作打合せ
 - 22日(土) 提案作品講評会
 - 23日(日) 実施制作打合せ
- 7月24日(月) ~ 8月21日(月) 各班・提案作品の制作
- 8月22日(火) ~ 28日(月) 合宿にて原寸制作ファイナル
 - 22日(火) 現地集合・資材搬入・制作段取り
 - 23日(水) ~ 26日(土) 原寸模型制作(4日間)
 - 27日(日) 公開プレゼンテーション
 - 28日(月) 撤去・清掃・解散

“今、この場所から” 伝えたいことを、空間として表現してください。

日本仏教の中心である比叡山に、全国で建築を学ぶ大学生が集まり、過去1200年に渡って受け継がれてきた歴史を、現代の問題とともに未来へとつなげていくために、「今、この場所から」伝えていくべきことを、それぞれが真剣に考え、原寸大の空間として表現します。延暦寺発祥の地であり、本堂にあたる根本中堂を中心とする区域において、作品を展示することで、訪れた人が中に入り、心を落ち着かせ、祈りを捧げることができる、小さな建築空間を創出します。

将来を担う学生たちが今という時代に向き合い、この場所のできることに全力で取り組むことで、「今、この場所から」世界に向けたメッセージを発信していきます。学生たちはきっと、その若い感性によって新たな発見をし、未来を創造する提案をしてくれることでしょう。



敷地候補：大講堂脇

敷地候補：大講堂前

【制作内容】

“唯一無二の歴史的風土を守るために、あなたの提案を実現化してください” 原寸模型を地域産材(自然素材 / 木材、和紙、土、石など)の材料で制作

Architectural Workshop Hieizan 2017 開催記念 説明会講演会

全国の建築学生が合宿にて制作を行う「建築学生ワークショップ」を、今年は8/22(火) - 8/28(月)に比叡山延暦寺にて開催します。このワークショップの参加募集の説明会と開催を記念して、活躍中の建築家が自身の学生時代の体験を通して、現在の作品にどう影響していたのかをレクチャーしていただきます。ワークショップへの参加を予定していない方でも、どうぞお気軽にご参加ください。

東京会場

東京大学(弥生キャンパス) 農学部 弥生講堂アネックス

東京メトロ南北線「東大前駅」徒歩3分
東京メトロ丸の内線・大江戸線「本郷三丁目駅」徒歩10分

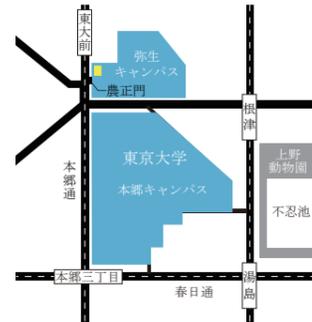
5月11日|木|18:30 - 20:00 (18:00 開場)

入場無料 | 定員：先着100名 | 要申込 <http://ws.aaf.ac>
※ 当日のご参加も若干名様まで可能です。
※ 開催日程・場所は予告なく変更する可能性があります。
※ ウェブサイトを再度ご確認ください。



基調講演 **西沢大良** (建築家)

1964年東京生まれ、建築家・大学教授。主な作品は、碓用町林業総合センター(2004)、沖縄KOKUEIKAN(2006)、駿府教会(2008)、宇都宮のハウス(2009)、直島宮浦ギャラリー(2013)、今治港再生事業(進行中)ほか。主な論文は、現代都市のための9か条(新建築2011年10月号、同2012年5月号)、木造進化論(西沢大良木造作品集2004-2010/inax出版)、立体とアクティビティ(西沢大良1994-2004/ toto出版)ほか。主な受賞は、AR-AWARD 最優秀賞(英国)、ART&FORM 最優秀賞(米国)ほか。作品集は、西沢大良1994-2004(toto出版)、西沢大良2004-2010木造作品集(inax出版)。



京都会場

京都大学(吉田キャンパス) 百周年時計台記念館 国際交流ホールIII

京阪本線「出町柳駅」徒歩10分
京都市営バス「京大正門前」または「百万遍」下車 徒歩10分

5月18日|木|18:30 - 20:00 (18:00 開場)

入場無料 | 定員：先着100名 | 要申込 <http://ws.aaf.ac>
※ 当日のご参加も若干名様まで可能です。
※ 開催日程・場所は予告なく変更する可能性があります。
※ ウェブサイトを再度ご確認ください。



基調講演 **平田晃久** (建築家)

1971年大阪府に生まれる。1994年京都大学工学部建築学科卒業。1997年京都大学工学研究科修了。伊東豊雄建築設計事務所勤務の後、2005年平田晃久建築設計事務所を設立。2015年より京都大学准教授就任。主な作品に「樹屋本店」(2006)、「Bloomberg Pavilion」(2011)、「Kotoriku」(2014)等。第19回JIA 新人賞(2008)、Kaohsiung Maritime Cultural & Popular Music Center 国際競技二等(2011)、Elita Design Award(2012)、第13回ベネチアアピエンナーレ国際建築展金獅子賞(2012、日本館)、太田駅前文化交流施設プロポーザル最優秀賞(2014)、等受賞多数。著書に『現代建築家コンセプト・シリーズ8 平田晃久 建築とは < からまりしろ > をつくることである』(LIXIL 出版)等。2016年にはニューヨーク近代美術館(MoMA)にて“Japanese Constellation”展(2016)参加。

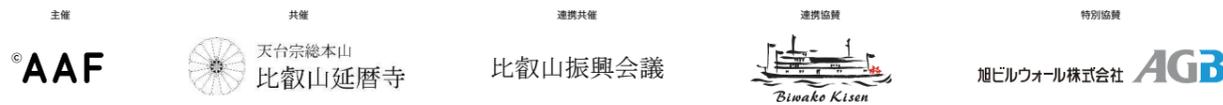


開催の様子(2010 奈良・平城宮跡)

開催の様子(2011 滋賀・竹生島)

開催の様子(2015 和歌山・高野山)

開催の様子(2016 奈良・明日香村)



武円超（比叡山延暦寺・管理部主事） × 平沼孝啓（建築家）

Photo : © Satoshi Shigeta



武 円超（比叡山延暦寺・管理部主事）



平沼 孝啓（建築家）

—— 全国の大学生が参加するこの建築学生ワークショップは、関西圏で開催地を変えながら開催していきます。特性をはっきりと持つ場所で開催することにより、建築や芸術、デザインを学ぶ若い世代が、歴史遺産とされる場所でしか体験できない貴重な経験を通じて、場所のコンテクストからの建築の解き方を深めていききっかけをつくっていきたいと思っています。

そして今年は、日本の仏教の中心に位置する比叡山という一種、特殊な場所の魅力にひかれて、開催地として希望をしました。この場所の特性を用いるため、大きく分けて「歴史」「場所性（地形）」「現代の問題」の観点から提案を求めるものを探っていきながら、ワークショップ開催の意義についてお伺いしたいと思います。

本日は、来年の開催に際して多大なご尽力をくださいます、比叡山延暦寺の武先生、そして、この建築ワークショップのオーガナイザーとしての役割を担い続けてくださいます、建築家の平沼先生にお話しをお聞きしながら、今年の比叡山でのワークショップ開催についてお聞きします。



対談の様子

平沼：はじまりのご質問をする前に、比叡山延暦寺は、世界の平和や平安を祈る寺院として、さらには「学問」の修行の道場として、日本仏教各宗各派の祖師高僧を輩出された、「日本仏教の母山」と仰がれています。山内は「東塔（とうとう）」「西塔（さいとう）」「横川（よかわ）」と呼ばれる3つの区域に分かれ、東塔は「現在」、西塔は「過去」、そして横川は「未来」空間を現し、そのご本尊をお参りすることで、根本に立ち返り、今、生かされていることに感謝をする「祈り」の場所とお聞きしてきました。まずは、この山が現代にまで続く聖地のような場所となり、現代にもたらした思想の背景にある、この地に暮らす人たちの生活背景はどのようなものでしょうか。

武：今年は、伝教大師最澄上人が誕生されて1250年の年でした。最澄上人は比叡山の麓、坂本で生まれたことから、ご生誕の地「生源寺」を中心に、坂本にある学校や街も一緒になって、現在もお祭りや法要をしています。また平成24年から始まりました「祖師先徳讃仰大法会」では、延暦寺には多くの高祖、祖師の方がおられますが、その方々の遠忌も含めて、平成33年の伝教大師1200年大遠忌をお迎えすることになっています。

平沼：「大法会」というような法要やお祭りを重ねることにより、山あつての街、街あつての山の関係をずっと築きあげているのですね。武さん、根本中堂・平成の大改修の時期は、大法会と重ねたということでしょうか。



根本中堂

武：いえ、今回の大改修は、たまたま重なったといった方が良いでしょう。多くのお堂もそうですが、大改修は基本的に60年くらいに1度。うちの根本中堂と知恩院御影堂、清水寺本堂などは、ほぼ同じ時期、徳川三代将軍家光公の時に建立しました。根本中堂は1642年に竣工で、現在まで370年くらいです。建立からの改修頻度は、60年だったり、70年だったりという期間の変化はありますが、大体60年くらいで、屋根がもたなくなってくるんですよ。平沼さんは、よくご存じだと思いますが、屋根が悪くなって雨漏りしたりすると、建物全体がものすごく痛んでしまう。創建当初は、根本中堂本堂も全部榎葺きになっていたのですが、江戸時代後期の改修の中で、銅板に変わってきました。銅板はハゼが切れてしまうので60年を目処にしています。知恩院さんも清水寺さんも保存修理をされていますが、これまでも同じような時期に改修しています。今回もほぼ同じ時期だったんですね。

平沼：銅板という素材全体が悪くなるわけじゃなくてハゼの部分。改修という再建を重ねることで、この技術の継承が蓄積され、建築を存在させているわけですね。そしてこの延暦寺は、世界平和を守る寺院として、学問の修行の場として、日本の母山と呼ばれている場所です。これまで1200年以上、思想という存在が継承され続けた理由はなぜでしょうか。

武：延暦寺は皆さんが昨年開催された高野山と同じ時期に開かれているので、根底にあるものは同じようなことだと思うのですが、人を惹きつける何かがあると感じています。高野山は密教を中心とした真言の教えですし、うちは法華経を中心とした天台の教えです。天台の教えは、法華経が一番中心ですが、密教や座禅、戒律も重要な要素となっています。このように多くの教えがあるので、日本仏教の母山と言われてます。浄土宗や浄土真宗、日蓮宗など、鎌倉新仏教といわれる、新しい宗派のお祖師さん。法然さんや親鸞さん、日蓮さんや栄西さんは、皆、比叡山で修行をされています。それ

ぞれ比叡山で学んだ教えを持ち帰り、各地で深め広めていった。新しい宗派というのをつくり受け継がれていかれたのですね。

また比叡山は修行の山です。「修行」と言えば厳しそうですが、厳しだけが修行ではありません。もちろん現在も続く、千日回峰行や浄土院の十二年籠山行、礼拝行や座禅、そういった目に見える行はもちろん「修行」といいますが、今日、こうやって平沼さんとお話ししているのだから、お坊さんにとっては修行と言えます。天台宗の基本とされる修行は「四種三昧行」と言って4つあります。1つは「常坐三昧」という常に座っているだけの修行。座禅をするっていう修行方法。2つ目は「常行三昧」という、「南無阿弥陀仏」と阿弥陀さんの名前を唱えながら、仏さんの周りを歩く。そして3つ目は「半行半坐三昧」という、半分ずつですね。座ると、歩くのと、半分ずつ行っている。これは基本的に形の決まった3つの修行なんですけど、それ以外に「非行非坐三昧」というのがあります。座る事もしない、歩く事もしない。それは日常生活なんです。形にとらわれない日常生活でも修行になりますよっていう事で、日ごろの行いをおろそかにしないよっていう事を言われています。テレビでみるような「修行は滝に打たれて」という形あるものだけが修行ではないのです。私たち僧侶のやっていることは、一般の方々を、仏様の世界に導く橋渡しをすることです。もちろん私たちだって、悟りを開いて仏さんの世界に行ってみたいという気持ちはありますけど、一般の方々はこの仏様の教えを伝えて、それによって皆さんの心や気持ちを救いたいということが、1番の目的になります。私たちも1人で行をしていたらそれで良いのかというと、やっぱりそうではないですよ。人間1人ではやっぱり何も成し得ないものですよ。

平沼：来年、「建築ワークショップ」という取り組みを、この地で開催させていただく中で、参加する学生たちが、比叡山という山や坂本という街、場所のコンテクストを手掛かりに



対談の様子

「延暦寺」での表現方法や提案を考えてきます。この学問を通じた修行の場所を現代まで繋いできた経緯を含めて、次の時代に繋いでいく時の「問題」は、今、何か抱えておられますか。

武：たくさんありますが、まずはやはり日本人が、宗教というものから離れてきてしまっていることですね。観光としては山に来てもらえるけれど、天台宗の教えを広めるってところまではなかなか根づかない。もちろん来てもらうだけでも、その教えを知るひとつにはなるのですが、なかなか深まらないのが心配です。あと私たちみたいな僧侶の成り手です。やっぱりお坊さんが居ないとね、お寺を守っていけない。どこのお寺さんも同じような悩みだと思います。比叡山では昔、何千人という僧侶が修行していました。しかし明治時代になって「神仏分離」や「廃仏毀釈」があって、お寺の勢いは減ってしまいました。そして現代になって、いろいろな情報が人の周りに入って来るようになって、仏教に興味を持つことも減ってしまったのではないかと思います。比叡山でも「小僧さん」と呼ばれる若い人たちがお寺へ手伝いに来ていたのですが、現代はほとんどいないですね。

平沼：なるほど。もうひとつお聞かせください。比叡山は延暦寺さんが山の全ての管理をされてこられたと思うのですが、この美しい山の継承の歴史をお聞かせください。

武：そうですね、私たちは現在 1,600 畝以上の山林を保有しています。延暦寺の山林の範囲は滋賀県の琵琶湖からの見た比叡山のほぼすべてと、京都からは山頂付近のすこしの部分です。そしてこれまでの歴史は、古い記録に遡ると、江戸時代に「法度」という今でいう法律がありましたが、比叡山には山林に関する「法度」が出されています。例えば「この木々は伐採したらだめですよ」というものですね。比叡山は、織田信長による焼き討ちあり、その後江戸時代にかけて多くのお堂を建て直すのに、たくさんの木を使ったからだと思います。江戸時代にこのような法律が制定されて、山の木



恵心堂



対談の様子

が守られるようになりましたが、明治に入ると先ほど話した「毀釈」というのがあって、延暦寺だけじゃなく日本全国のお寺ですが、境内地の大部分を国に没収されました。明治の初めに取られて、返還されたのが明治 40 年ごろ。山は約 40 年間放置されたままでしたので荒れていた。この荒廃した山を、比叡山にとって一番いい状態を目指し相談をはじめたのが、東京大学におられた林学博士の右田半四郎先生です。右田先生と比叡山の山林の施業計画をつくり、杉や檜を植え整備をしていきました。山の管理や維持を続けていくため、山林を守り整備を行い、木材を売却して収入を得るやり方です。そのため、現在の比叡山は、ほぼ人工林です。以前は山林収入が延暦寺の大きな収入のひとつでしたが、近年では木の価格が最盛期の 1/10 以下となり、山の整備を行っていくには採算が合わないのが実情ですが、比叡山を守っていく上で、山林の整備は続けていかないといけません。

平沼：この山に学生らが入り、何か小さくても問題提議となるきっかけだったり、この場所を表現する建築をつくるんだ、という使命を持って参加します。どういうことを手掛かりにして、空間を表現していけばいいのかという読み解き方や、こういう所に着目していけばいいんじゃないか、というアドバイスをくださらないですか。

武：私たちが、山林を保有し、守っていく上で一番大切にしているのは、「どこの、どれだけの木を倒したらいいのか」を、「修行の山」であることを念頭に置き、山の麓やどこから見ても「修行の山」であると分かるように、延暦寺としてふさわしい山づくりを行う。それは文化財を守っていくことにもつながると思います。私たちは、山の本体はお大師さん。山に生えている木々は、お大師さんの衣である。と言っています。伝教大師さんの衣が破れていたら繕わないといけないので、伝教大師さんの衣が破れてないようにしなさいよ。と、そういう思いで山を管理しなさいと言われ続けています。恐らく、比叡山を訪れたことのない参加学生たちもいると思います。延暦寺にただ「お寺」という漠然としたイメージで来ると、自分の中の想像と大きく違うと思います。何か特別のイメージを持ってくるのではなくて、来てもらってから感じ、想い、考えてもらうのがいいと思います。

平沼：多くのプロセスをお聞かせくださったおかげで、制作のアイデアを探るきっかけになりました。最後になりますが、この比叡山という、場所の特徴をお聞かせください。

武：比叡山は、京都の都と大きな関係があります。学生の皆さんもよく知る歴史ですが、794 年 京都に平安京が移ってきました。この京都（御所）から見て「鬼門」の方向に比叡山があります。多くの建築を設計されておられるので、もちろん平沼さんは鬼門のことをよくご存知だと思います。今日のお話の設定をご準備され、AAF という法人の運営を担当し、建築学生ワークショップ比叡山の実現を担われている、海外で育てられた松本ガートナーさんや、参加される現代の学生さんに向けて少し話します。

「鬼」の姿は、虎柄のパンツを履いて牛の角が生えています。十二支で話すと、子、丑、寅、卯…と続くのですが、方位で示すと、子が北で、卯が東。この間に、丑寅があり、これが東北の方位を表し、東北の方向からは鬼のように良くないものが入ってくると言われています。京都から鬼門の方向見ると、比叡山があったのですね。当時の桓武天皇が京都に都を移した時、比叡山にお坊さんがいると聞いて、その最澄さんに「都を護ってほしい。」と頼まれました。そのため、現在も続く、延暦寺・根本中堂で毎日行うお勤めは、難しい言葉で「鎮護国家」といい、国を護るための祈願を行っています。現代では、ここ比叡山で仏教だけでなく、キリスト教やイスラム教など、さまざまな世界の宗教の代表者が集まる「比叡山宗教サミット」が毎年開催され、世界平和の祈りの集いの場所となっています。

平沼：今、お話しくださった歴史とか場所性とか、ここに根付く系譜に基づいた提案を、参加する学生たちにして欲しいと思うのと、根本中堂を中心とした区域を、お預かりさせていただくので、フォーリーがメインじゃなくて、訪れた人たちを中心として、心を落ち着かせて祈りを捧げることができるような、そういう空間を求めていきたいと思います。本日は、ありがとうございました。

武：こちらこそ、ありがとうございました。来年の夏。このサマーワークショップで創られる、空間体験を楽しみにしています。



対談の様子



阿弥陀堂

——— **たいへん貴重なお話しが聞けて、本日はどうもありがとうございました。この対談を通じて、このワークショップが参加学生にとって、とても貴重で意義深いものになるような気がしています。そして将来、この場所で開催した意義につながっていくような、提案作品を募りたいと思います。**

（平成 28 年 12 月 22 日 比叡山延暦寺 延暦寺会館にて）

編集後記

「日本の建築」が世界に誇れる存在である理由は、比叡山延暦寺様のような長い時間に築かれた日本の精神性に関係が深いことをあらためて知る機会となりました。先祖の教えを敬い、自然を愛し、和をもって貴しとした、私たちがもつ大切な日本人の精神性だと感じています。

一般社会にも投げかけていけるようにと 2010 年より、地元の方たちと共同開催での参加型の取り組みになっていくことを目指し、平城遷都 1300 年祭の事業として、考古遺跡としては日本初の世界文化遺産、「平城宮跡(奈良)」での開催にはじまりました。続く 2011 年度は滋賀・琵琶湖に浮かぶ「神の棲む島」と称される名勝史跡、「竹生島(滋賀)」にて、宝厳寺と都久夫須麻神社と共に、無人島である聖地に、地元周辺の方たちと汽船で通う貴重な開催ができました。そして昨年、真言宗総本山の世界遺産「高野山(和歌山)」では、開創法会 1200 年となる 100 年に 1 度の年に、金剛峯寺様との取り組みから、境内をはじめとした聖地で開催し、猛烈な暑さの中での開催となりました今年の夏のワークショップは、日本の故郷とも称されるこの原初の聖地、「明日香村(奈良)」において開催を無事に終えることができました。ファイバースコープによって北壁の玄武図が発見されてから 30 年を経て、一般公開される直前のキトラ古墳と国営飛鳥歴史公園の開園プレ事業としての位置づけで、貴重なキトラ古墳の麓に小さな建築を実現されたことは、今後、建築をつくる生涯においても稀で、なかなか得難い大変貴重な経験となり、必ずや参加をした学生の皆さんの記憶に残る取り組みになったことでしょう。そして今年は、この聖地、比叡山延暦寺。日本を代表する建築家や構造家、全国の大学で教鞭を執られる先生方の厳しくも愛のある指導を受けることも、生涯の記憶に残るような幸運であったと、想い返すことになる貴重な機会となるでしょう。この大切な記憶がまたひとつ増えるような取り組みです。



聞き手：松本ガートナー祥子（AAF | 建築学生ワークショップ法人運営マネージャー）